第十二章　名詞・冠詞

名詞

レクチャー1

「数えられる名詞[可算名詞]」と「数えられない名詞[不可算名詞]」の見分け方。

名詞に関して、日本語と英語で最も異なるのは、英語には「数えられる名詞[可算名詞]」と「数えられない名詞[不可算名詞]」があるという点です。
ネイティヴは、両者の区別を瞬時に行うことができます。ということは、彼らの頭の中には、明確な両者を区別する基準があることになります。
では一体、それはどのような基準なのか。それが以下になります。

①「数えられる名詞」…(その名詞)を聞いてイメージ[形・まとまり]が具体的に浮かぶもの。つまり絵に描けるもの。

②「数えられない名詞」…(その名詞)を聞いてイメージ[形・まとまり]が具体的に浮かばないもの。つまり絵に描けないもの。

皆さんは①の方だけを覚えておけば大丈夫です。なぜなら、①の基準からはずれるものは自動的に②、つまり「数えられない名詞[不可算名詞]」となるからです。そうすると「情報」「愛」「知らせ」「忠告」「砂糖」「家具」…。これらが不可算名詞であることは容易に理解できるでしょう。

「え、家具って形あるんじゃないの！？」

と思われる方。もし今、あなたが紙とペンを手渡され、こう言われたとしましょう。

「furniture(家具)を描け」

どうでしょうか。すぐにイメージがわいて、描くことができるでしょうか。

「えっと…家具って、具体的に何を描けばいいの？」

きっと、あなたはそう思うはずです。たしかに家具といっても、タンスもあれば、鏡台もあります。一瞬何を描けばいいのか迷ってしまいますね。つまり家具には、「(「家具」という)具体的な形」はないのです。故にこのようなものは「数えられない名詞[不可算名詞]」になるのです。

㊟これは baggage(荷物) や scenery(風景) などにも当てはまる。

この基準が理解できると、同じチョコレートでも、

①コンビニに売っている箱に入ったお菓子のチョコレートは可算名詞。
②お菓子の原料としてのチョコレートや液体のチョコレートは不可算名詞。

となるのも納得がいくことでしょう。

もう少し高度な例をあげてみましょう。以下の理由を皆さんは理解できますか？

① life(人生) は不可算名詞。
② a happy life(幸せな人生[暮らし]) は可算名詞。

「人生」という意味の life が不可算名詞になるのは、ここまでの説明で理解できるでしょう。問題は②です。②だって、「形」は存在しません。なのに可算名詞になる。その理由、わかりますか？
それは、「幸せな人生[暮らし]」と言った場合、漠然と「人生」と言う場合よりイメージがわきやすいからです(たとえば、「家族みんなが笑顔で食卓を囲んで団欒を楽しんでいる…」といったように)。

㊟このように、不可算名詞(抽象名詞や物質名詞)に形容詞がつくと、具体的な例や種類を表し、a[an] がつく(つまり可算名詞化する)ことが多い。

更にこんな例をあげてみましょう。coffee など、液体状のものは「数えられない名詞」と学校で習ったかもしれませんが、喫茶店などでの会話ではこんな表現が成り立ちます。

We ordered three coffees.
私達はコーヒーを三つ注文した

coffee そのものは具体的なまとまりに欠けるので数えられません。ところが喫茶店で出されるようなコーヒーは、ソーサーに乗ったカップの中に入っている絵(イメージ)を、多くの人が共通して頭に浮かべることができます。その結果、１杯２杯と数えられるようになるというわけなのです。
このように「数えられる」か「数えられない」かは、”具体的なまとまり[形]”と

いう感覚が感じられるか[それが頭に「絵」として浮かぶか]どうかで決まってくるということを覚えておいてください。

更にもう１つこんな例をあげてみましょう。「私は酢豚にパイナップルを入れた」と言う場合、どちらの英文が正しいでしょうか。

① I put a pineapple in the sweet and sour pork.
② I put pineapple in the sweet and sour pork.

正解は②です。
①では an pineapple と、可算名詞として pineapple を使っています。ということは、(この酢豚の中のパイナップルは)まとまった具体性(多くの人が共通して頭の中で絵に描ける形)を持っていることになるので、「パイナップルをまるごと(そのままの形で)１個」を酢豚に入れたということになってしまい不自然。
逆に、②の方は、無冠詞で pineapple を用い、不可算名詞として扱っています。ということは、まとまった形を念頭に置いていないことになります。確かに酢豚に入れるパイナップルは細切れになっており、元の「形」はイメージできませんね。したがって②の方が正しいのです。

ついでにもう一つ大学受験の問題から。以下の①と②。どちらの表現が正しいかわかりますか？

① You have egg on your tie.
② You have an egg on your tie.

正解は①です。
②のように言ってしまうと、丸い卵一個をネクタイにくっつけていることになってしまうのです。

最後にもう１つだけ。kindness にも、「可算名詞」と「不可算名詞」の両方の意味があります。不可算名詞の場合、「親切、優しさ」という意味。確かにこれは具体的なイメージ[形]が浮かびません。つまり絵に描けません。

(ex) He did it all out of kindness.
彼はそれをすべて親切心からやったのだ
Treat everybody with kindness.
だれにでも優しく接しなさい

kindness が可算名詞となる場合、「親切な行為」という意味になります。こち

らは逆に具体性があり、イメージが浮かびます(電車の中でおばあさんに席を譲ってあげるとか…)。

(ex) I received many kindnesses from him.
彼からいろいろ親切にしてもらった
Will you do[show] me a kindness?
お願いがあるのですが

このように可算名詞、不可算名詞両方の用法があるのは、life, pneapple, egg, kindness だけではありません。多くの名詞には両方の用法があるのです。
では、ある名詞を(「可算名詞」「不可算名詞」に)使い分ける基準は何か？それは、単純にその名詞が、(客観的に)「物理的な形」を有しているかどうかだけはないはずです。
実は、ある名詞を可算・不可算どちらで使うかは、話し手[書き手]がその名詞を語る[書く]際に、その具体的なイメージ[形、まとまり]を頭に描いて語っているかどうかで決まるのです。つまり

①具体的なイメージ[形、まとまり]を頭に描いて語っている → 可算名詞
②具体的なイメージ[形、まとまり]を頭に描いて語っていない → 不可算名詞

繰り返しますが、単純にその名詞が(客観的に)「物理的な形」を有しているかどうかだけはないのですね。このことをしっかり頭に入れておきましょう。

レクチャー2

頻出の不可算名詞。

以下は、不可算名詞なのに、日本人の感覚からつい「数えられる名詞[可算名詞]」とみなしてしまいがちなものです。
これらの名詞は数えられないわけで、冠詞の「a[one]」はつかないし、もちろん複数形の「s」もつきません。太字のものは特に大学入試などでは頻出です。

(1)ある種類全体を表わす集合名詞。

「集合名詞」とは、「家族」「クラス」など、いくつかの同種類のものの集合体を表す名詞のこと。　※色字の語は頻出。

(ex) machinery「機械類」 baggage「荷物類」 luggage「荷物類」 furniture 「家具類」
poetry 「詩歌」 mail 「郵便物」 clothing「衣類」 merchandise「商品」
scenery 「景色」 fruit 「果物」 game 「獲物」 food 「食物」

ちなみに machinery は機械類全体を表す名詞(決まった「形」がない)なので数えることはできませんが、machine は１つ１つの機械を表す名詞(こちらは決まった「形」がある)なので数えることができます。 同様の関係が poetry(詩歌) と poem(1つ1つの詩) にもあてはまります。以下にそのような名詞同士の関係を表にしてみました。

ある種類全体を表すもの（数えられない）	それを構成する個々のもの（数えられる）
baggage[luggage]「手荷物」	bag,suitcase,box等
clothing「衣類」	clothes「衣服」,shoes等
fiction「文学作品としての作り話」	novel「長編小説」,story「物語」等
furniture「家具」	table,chair,bed等
scenery「1地方全体の景色」	scene「(個々の)景色」
jewelry「宝飾品」	jewel「(個々の)宝石」
pottery「陶器類」	pot「(個々の)陶器」
merchandise「大口の商品」	goods「(小売の)商品」

⑵物質名詞。

「物質名詞」とは、物質の名で、一定の形や区切りがないもののこと。

(ex) water「水」 rubbish「ゴミ」 sugar 「砂糖」 salt 「塩」 money「金」
rain 「雨」 rice 「米」 coffee「コーヒー」 bread「パン」

上記の中で、日本人に最もなじみにくいのが money でしょう。しかしこんなふうに考えたらどうでしょう。「お金を３個ください」と言えるでしょうか？そうとらえると、money が数えられないのもわかると思います。一方「札(bill)」「硬貨(coin)」は、(日本語と同じように)数えられます。

⑶抽象名詞。

「抽象名詞」とは、具体的な形を持たない抽象的な概念の名で、性質・状態・動作・感情・学問主義・運動・病気などを表す名詞のこと。

(ex) advice 「忠告」 progress「進歩」 leisure 「余暇」 damage 「被害」
luck 「運」 evidence「証拠」 knowledge「知識」 weather 「天気」
wisdom「知恵」 music 「音楽」 homework「宿題」 attention 「注意」
behavior「行為」 fun 「楽しみ」 proof 「証明」 nonsense 「無意味な事」
harm 「害」 conduct「態度」 news 「知らせ」 information「情報」
applause「拍手喝采」 ※色字の語は頻出。

レクチャー3

「形容詞＋抽象名詞[物質名詞]」。

抽象名詞(や物質名詞)に形容詞がつくと具体的な例や種類を表し、a[an] がつく(つまり可算名詞化する)ことが多いんですね。

(ex) She had a happy marriage.
彼女は幸せな結婚生活を送った

上の英文の場合、marriage は本来不可算名詞なのに、happy という形容詞がつくことによって可算名詞化し、冠詞の a がついています。
このように形容詞がつくと抽象名詞(不可算名詞)が普通名詞(可算名詞)化する理由については「レクチャー１」で説明しましたね。
そしてこのようなことは、以下のような物質名詞でも起こります(これも「レクチャー１」で説明しましたね）。

breakfast 「朝食」 lunch「昼食」 coffee「コーヒー」
dinner/supper「夕食」 tea 「お茶」 wine 「ワイン」

(ex) They serve good lunches here.
ここはうまい昼めしを食わせるよ

ただ、形容詞がついても原則として a[an] のつかない抽象名詞もあります。

× He is making a steady progress in speaking English.

○ He is making steady progress in speaking English.
彼は英語を話すのが着実に進歩している

上の例のように progress は、形容詞が前につこうがつくまいが不可算名詞です。以下にそのような抽象名詞の具体例をあげてみました。これも太字の名詞は頻出です。 ※色字の語は頻出。

(ex) advice「忠告」 applause「拍手喝采」 music「音楽」 traffic「交通」
conduct「態度」 damage「損害」 behavior「行為」 wisdom「知恵」
harm「害」 homework「宿題」 fun「楽しみ」 work「仕事」
luck「運命」 information「情報」 news「知らせ」
nonsense「無意味なこと」 progress「進歩」 weather「天気」

また、形容詞などが前につかなくても、

①抽象名詞なら「そのような性質を持った人[物]」「具体的な種類や行動(の結果)」などを表す場合
②物質名詞でも「具体的な種類や製品」などを表す場合

つまりその具体的なイメージ[形、まとまり]を頭に描くことができる場合には、可算名詞として用いることができます。
以下にその具体例をあげてみましょう。

(ex) His new car is a beauty.
彼の新車はすばらしい
beauty を「美しい人[物]」という場合、上例のように数えられる。「美」「美しさ」という抽象名詞として用いる場合には数えられない。
(ex) I cannot understand his sense of beauty.
彼の美的感覚を理解できない

Patience is a virtue.
忍耐は美徳である
He explained the virtues of his own car.
彼は自分の車の長所を説明した
抽象的な概念としての「美徳」という意味では virtue は数えられないが、上例のように「個々の美徳」「長所」といった場合には数えられる。

This is one of his achievements as a scientist.

これは科学者としての彼の業績のうちの１つだ

上例のように「(達成された行為・結果としての個々の)業績」という場合には achievement は数えられる。

もちろん抽象的概念としての「達成」「成就」という場合には数えられない。

(ex) I was swimming in a sense of achievement.

私は達成感にひたっていた

Turn off the lights.

電灯を全部消しなさい

light を「光」「明るさ」という意味で用いる場合には数えられないが、「灯」「電灯」という意味で用いる場合には数えられる。

(ex) The sun gives us light.

太陽は我々に光を与える

He tripped over a stone.

彼は石につまずいた

stone を「一つ一つの石」という場合には数えられる。しかし下のように「(素材としての)石」という場合には数えられない。

(ex) This tool is made out of stone.

この道具は石でできている

レクチャー4

不可算名詞の数え方。

いくら数えられないといっても、現実には「３つの忠告(advice)」「２つの知らせ(news)」と言うことは十分あり得ますね。そのような場合にでは、どうやって表現するのでしょうか。

実は、information や advice, news などのような抽象名詞を数える場合には、

a piece of～

を用いるのです。

もちろん(つく名詞によって) a piece of 以外にも様々な表現があります。そこでこのような不可算名詞を数える場合につく表現を、以下にまとめてみました。

⑴ a cup of coffee　「一杯のコーヒー」

⑵ a glass of water　「一杯の水」

(3) a slice of bread 「一枚のパン」
(4) a loaf of bread 「一塊のパン」
(5) a bottle of ink 「一本のインク」
(6) a sheet of paper 「一枚の紙」
(7) a spoonful of sugar 「（スプーン）一杯の砂糖」
(8) a lump of sugar 「（一個の）角砂糖」
(9) a cake of soap 「（一個の）石けん」
(10) a piece of baggage[luggage] 「（一個の）荷物」
(11) a piece of furniture 「（一個の）家具」
(12) a piece of information 「１つの情報」
(13) a piece of advice 「１つの忠告」

(14) a pair of
- glasses[spectacles] 「眼鏡」
- scissors 「はさみ」
- trousers 「ズボン」
- chopsticks 「箸（はし）」
- pajamas 「パジャマ」
- pants 「パンツ」
- shoes 「靴」
- socks[gloves] 「靴下[手袋]」

a pair of は「同一の２つの部分からなる切り離せない(一対の)もの」に用いる。a couple of は「(種類が同じだけで、それ以外は共通点の薄い)同種の２つのもの」に用いる。

(ex) a pair of socks
(そろいの)ソックス１足
a couple of socks ☞種類が同じだけで、「そろいの靴下」とは限らない。
２つのソックス

共に後ろに複数名詞が来るが、特に a pair of が上記の意味の場合、常に複数形で用いる名詞をとる(もちろんこれ以外に、「a pair of robbers:1組の泥棒」などという言い方もある。これは単に「共通点のある1組の」という意味。それから a couple of の場合、数がはっきりしない時や漠然と言う時に用いることもある)。

(ex) a couple of people
２、３の人達

可算名詞と不可算名詞につく数量形容詞。

数や量の「多少」を表す（数量）形容詞には、

⑴可算名詞にのみつくもの
⑵不可算名詞にのみつくもの
⑶どちらにでもつけられるもの

の３つがあります。それぞれ具体的に見ていきましょう

⑴可算名詞の複数形につくもの。

①否定的な表現

1.「ほとんど～ない」

few

2.「ほんのわずかの～」

only a few

②肯定的な表現

1.「2、3の～」

a few　☞a small number of という言い方もあるが a few の方が一般的。

2.「たくさんの～」「多くの～」

many

a number of

ちなみに the number of A は「Aの数」という意味。a number of A と異なり「単数扱い」になる。

(ex) The number of automobiles has[×have] greatly increased.

自動車の数が非常に増加した

A number of students have[×has] come.　☞a number of は many と同じ意味なので後ろの動詞は have となる。

たくさんの学生が来た

a large[good/great] number of

numbers of

many a＋単数名詞　　☜このように many a だけは後ろに「単数名詞」をとる。

(ex) Many a man thinks so.

多くの人がそう願う

=Many men think so.

a great many

quite[not] a few ☜要注意!

⑵不可算名詞につくもの。

①否定的な表現

1.「ほとんど～ない」

little

2.「ごくわずかの～」

only a little

②肯定的な表現

1.「少しの～、少量の～」

a little　　☜a small amount[quantity] of という言い方もあるが a little の方が一般的。

2.「多くの、多量の～」

much

a good[great] deal of　　☜much のイコール表現は全て要注意!

a large[great/good] amount of＋不可算名詞

a large quantity of

quite[not] a little

⑶両方につくことができるもの。

①「ほとんど～ない」

hardly any

scarcely any

②「たくさんの～」

a lot of

lots of

plenty of

some(いくつかの)も、可算名詞、不可算名詞どちらにもつくことができる。
同じ意味でも several は可算名詞にしかつかない。

(ex) There were some students in the hall.
He gave me some[×several] good advice.

レクチャー6

その他の名詞と「数」に関する注意事項。

⑴複数形の「ｓ」の位置を間違えやすい名詞。

「レクチャー４」で、 a piece of を用いた不可算名詞の数え方を学びましたが、では「３つの忠告」という場合、複数を示すｓはどこにつくのでしょうか。
それは piece につきます。つまり「３つの忠告」は

three pieces of advice

と表現します。決して three piece of advices とはなりません(advice 自体は不可算名詞なので、複数形などない)。
以下にそのような、複数形の「s」の位置を間違えやすい名詞(を用いた表現)をいくつかあげてみました。

① a piece of baggage → two pieces of baggage 「２つの荷物」
×two piece of baggages
② a father-in-law → fathers-in-law 「義理の父」
③ a passer-by → passers-by 「通行人」
④ a looker-on → lookers-on 「傍観者」

⑵必ず複数形を用いなければならない表現。

慣用的に、目的語が必ず複数形になる表現があります。以下がその代表例です。

① make friends with A 「Ａと友達になる」
(ex) I've made many friends in that country.
その国に多くの友だちができた

② shake hands with A　　「Ａと握手する」

(ex) I shook hands with Mr. Bush at the party.

私はそのパーティでブッシュ氏と握手した

③ be on ～ terms with A　　「Ａと～な間柄である」

「～」の部分には、good[良い]、bad[悪い]、speaking[言葉を交わす]、visiting[訪ね合う] などが入る。

(ex) She was on bad terms with her family.

彼女は家族との折り合いが悪かった

④ in terms of A　　1.「Ａの点で」

=in ～ terms　　2.「Ａの言い方[言い回し・言葉]で」

(ex) We should see the event in terms of the whole world.

世界的見地からその事件を見なければいけない

I can't describe her beauty in any terms.

どんな言葉を使っても彼女の美しさを言い表せない

⑤ come to terms　　1.「合意する」「仲直りする」

2.「あきらめて従う」

(ex) The two sides finally came to terms.

両者はやっと仲直りした

You must come to terms with the fact that you will never be a first-rate actor.

君は、自分が一流の俳優にはとうていなれないという事実を受け入れなければならない

⑥ change trains[planes] at～　　「～で列車[飛行機]を乗り換える」

(ex) I had to hange trains at the next station for New York.

次の駅でニューヨーク行きに乗り換えなければならなかった

⑦ change hands　　「持ち主が変わる」

(ex) The house has changed hands.

その家は持ち主が変わった

⑧ exchange seats with A　　「Ａと座席を交換する」

(ex) Will you exchange seats with me?

ボクと席を代わってくれませんか

seats 以外でも「Ａを交換する」という場合、には複数名詞が来る。

(ex) exchange opinions

意見を(取り)かわす

We exchanged gifts.

我々はお互いにプレゼントを贈った

They exchanged blows.

彼らは殴り合いをした

⑨ take turns (in/at) doing～　　「交替で～する」

doing～ の部分は to do[原形]～ 、つまり不定詞を用いてもいい。

(ex) My husband and I take turns looking[to look] after the baby.

夫と私で交替で赤ちゃんの世話をしています

⑩ put on airs　　「気取る」

(ex) He is always putting on the airs of a scholar.

彼はいつも学者ぶっている

She is always putting on airs.

彼女はいつも気取っている

He put on airs with his learning.

彼は自分の学識を鼻にかけていた

⑪ give one's best regards to A(人)　「Aによろしくと伝える」

(ex) Please give my best regards to your family.

どうかご家族によろしくお伝えください

⑫ take measures　　「手段[策・措置]をとる」

(ex) He took appropriate measures against it.

彼はそれに対して適切な措置をとった

⑬ change one's shirts　　「シャツを着替える」

(ex) He sweats easily so he frequently changes his shirts.

彼はすぐ汗をかくので、頻繁にシャツを着替える

⑶可算名詞と不可算名詞の両方の意味をもつ名詞がある。

①物質名詞(不可算)と普通名詞(可算)の両方の意味を持つもの

普通名詞とは、「一定の形や区切りがある[持つ]もの」で「同じ種類のものに共通に適用できるもの」を言う。たとえば「犬」「猫」「机」「椅子」などは、すべて普通名詞である。

[物]fire :火　[物]iron :鉄　[物]paper :紙
[普]a fire:火事　[普]an iron:アイロン　[普]a paper:⑴新聞 ⑵書類、論文

[物]cloth :布　[物]wood :木材　[物]glass :ガラス
[普]a cloth:テーブル掛け　[普]woods:森　[普]a glass:⑴コップ ⑵鏡 glasses:眼鏡

②抽象名詞(不可算)と普通名詞(可算)の両方の意味を持つもの

[抽]room : 余地、ｽﾍﾟｰｽ　[抽]work : 仕事　[抽]grammar : 文法
[普]a room : 部屋　[普]a work : 作品　[普]a grammar : 文法書

[抽]democracy : 民主主義　[抽]government : 政治　[抽]power : 力
[普]a democracy : 民主主義国家　[普]a government : 政府　[普]a power : 強国、大国

[抽]speech : 言語　[抽]chance : 可能性、見込み
[普]a speech : 演説　[普]a chance : 機会

③特に複数形で特別な意味を持つ名詞(分化複数)

arm : 腕
arms : 武器

content : 満足
contents : 内容

manner : ⑴手段、方法 ⑵態度
manners : ⑴礼儀 ⑵風習、習慣

air : 空気
airs : 気取り

good : 善
goods : 品物(複扱)

spirit : 精神
spirits : 気分

pain : 苦痛
pains : 骨折り(複・扱)

mean : ⑴中間 ⑵(形)下品な、卑しい
means : ⑴手段(単・複) ⑵財産(複・扱)

authority : 権威（者）
authorities : 当局、公共事業機関

「手段」という意味では means は「単数・複数両扱い」となる。「財産」という意味では「複数扱い」になる。

day : 日
days : 時代

glass : ガラス
glasses : 眼鏡

spectacle : 光景
spectacles : 眼鏡

work : 仕事
works : ⑴作品 ⑵工場

force : 力
forces : 軍隊

advice : 忠告
advices : 通知

ruin : 破滅
ruins : 遺跡

letter : ⑴文字 ⑵手紙
letters : 文学

time : 時(間)、歳月
times : 時代

custom ：習慣
customs：⑴関税(複・扱) ⑵税関(単・扱)

⑷ a people / peoples は「国民」「民族」。

(ex) The Japanese are said to be a hard working people.
日本人は勤勉な国民であると言われている
Asia is a home of many peoples.
アジアにはいろいろな民族がいる

⑸ The police は単数名詞？ 複数名詞？

Q： The police (is / are) after you. 警察が君を捜しているぞ

正解は are。集合名詞の中には、常に複数扱いされるものがあります。
このタイプの集合名詞は複数形をとらず、a[an] もつきません。the をつければ全体または特定のものを表します。この種の名詞には police 以外に、以下のようなものがあります。 ※色字は頻出。

(ex) cattle(牛)　clergy(聖職者)　people(人々)　poultry(家禽(かきん))

⑹ I received many kindnesses from him. は正しいか？

正しいです。(不定)冠詞の a や、本来可算名詞にしか付かない形容詞(many, few など)が抽象名詞(不可算名詞)の前について、その名詞が可算名詞化することがあります(その場合、具体的な行為や物・実例などを示すことになる)。上の英文の many kindnesses も、「たくさんの親切な行為」という意味になります。

(ex) An air conditioner is a necessity in a hot country like this.
こんな暑い国ではエアコンは必需品だ

上の英文では、 a necessity は「どうしても必要なもの」、つまり「必需品」という普通名詞(可算名詞)として使われています(もちろん無冠詞の necessity は「必要(性)」という抽象名詞、つまり不可算名詞である)。
同様に convenience も「便利さ、(好)都合」という意味では不可算名詞ですが、「便利なもの[機械・器具・サービス]、文明の利器」という意味では可算名詞と

なります。

(ex) as a matter of convenience
便宜上
An electronic computer is a great convenience.
コンピューターはたいへん便利なものだ

レクチャー7

「of + 抽象名詞」は形容詞化する。

たとえば「重要性」という意味の抽象名詞、importance に of をつけて、

of importance

とすると、これは「重要な」という意味になり、形容詞の important と同じ意味になります。以下に同じような例をいくつかあげてみましょう。

① of value	＝ valuable	「価値がある」
② of equal value	＝ equally valuable	「同様に価値がある」
③ of great use	＝ very useful	「とても役に立つ」
④ of no use	＝ useless	「役に立たない」
⑤ of some use	＝ a little useful	「いくらか役に立つ」
⑥ of world wide fame	＝ famous in the world	「世界的に有名な」
⑦ of courage	＝ courageous	「勇気のある」
⑧ of help	＝ helpful	「役に立つ」
⑨ of learning	＝ learned	「学識のある」
⑩ of sense	＝ sensible	「分別のある」
⑪ of worth	＝ worthy	「価値ある」
⑫ of culture	＝ cultured	「教養のある」
⑬ of promise	＝ promising	「前途有望な」

上例のように、この形で用いられる抽象名詞の前には no, little, great, much などの形容詞が付くことが多いですね。

レクチャー8

「with + 抽象名詞」は副詞化する。

たとえば「容易さ」という意味の抽象名詞、ease に with をつけて、

with ease

とすると、これは「容易に[簡単に]」という意味になり、副詞の easily と同じ意味になります。以下に同じような例をいくつかあげてみましょう。

① with difficulty	＝ difficulty	「やっとのことで、かろうじて」
② with success	＝ successfully	「首尾よく」
③ with diligence	＝ diligently	「勤勉に」
④ with kindness	＝ kindly	「親切にも」
⑤ with care	＝ carefully	「注意深く」
⑥ with rapidity	＝ rapidly	「素早く」
⑦ with fluency	＝ fluently	「流暢に」
⑧ with calmness	＝ calmly	「落ち着いて」
⑨ with energy	＝ energetically	「精力的に」
⑩ with reserve	＝ reservedly	「遠慮して」
⑪ with warmth	＝ warmly	「暖かく」
⑫ with vigor	＝ vigorously	「勢いよく」

レクチャー9

意味がまぎらわしい名詞。

(1)「客」。

① visitor : (1)訪問客(=caller) (2)観光客(=tourist, sightseer)
② guest : 招待客、ホテルの客 ⇔ host, hostess
③ customer : （商店などの）顧客
④ client : （医者・弁護士の）患者・依頼人

⑤ spectator　：（スポーツの試合等の）観戦客、見物人
⑥ audience　：（コンサート等の）観客、聴衆
⑦ passenger　：乗客
⑧ commuter：通勤客

⑵「料金」など。

① charge　：（サービスに対する）料金、手数料、使用料
② cost　：費用、原価
　price は商品等につける値段であるのに対し、cost は生産・入手・維持などのために実際に支払う費用。
③ debt　：借金
④ fare　：（交通機関の）運賃
⑤ fee　：⑴入場料、入学金(=admission fee)
　⑵授業料(=school fee)
　⑶(弁護士・医者等への)謝礼
⑥ fine　：罰金
⑦ postage：郵便料金
⑧ price　：（物の）価格
⑨ rate　：光熱費や電話代等
⑩ interest：利子、利息
⑪ tax　：税金
⑫ toll　：(道路等の)通行料、使用料
⑬ bill　：(ホテル・水道等の)料金
⑭ due　：⑴[one's due] 当然支払われる[与えられる]べきもの
　(ex) He finally has received his due.
　彼はついに当然の報いを受けた
　⑵[dues] 会費、使用料、手数料、税、料金、賦課金
　(ex) club dues クラブの会費
　membership dues 会費
⑮ fund　：基金

⑶「働いている人」。

① worker　：（最も一般的に）働く人
② employee　：従業員　=the employed　⇔ employer「雇い主」

③ part-timer　：パート、アルバイト　⇔ full-timer「専任」「常勤者」
④ laborer　：肉体労働者
⑤ clerk　：事務員、店員　cf; a bank clerk「銀行員」
⑥ secretary　：秘書
⑦ receptionist　：受付係
⑧ executive　：重役、管理職(員)

⑷「収入」。
① pay　：（サービス等に対する）報酬
② salary　：給料
③ income：収入
④ wage　：（肉体労働に対して支払われる）賃金
⑤ fee　：（医者・弁護士等に支払われる）謝礼

⑸「旅」。
① tour　：（観光、視察目的の）旅
② trip　：（特定の場所への短い）旅
③ travel　：（最も一般的に使う）旅
④ journey：（陸路で行く遠方への）旅、旅行
⑤ voyage：船（で行く）旅

⑹「仕事」「職業」。※work と business だけが「不可算名詞」(business は「可算名 詞」として用いられることもあり)。
① job　：報酬をもらってする仕事、勤め口[職業]
具体的で永続的なまた臨時の仕事
occupation のくだけた言い方。
② work　：抽象的な[広い]意味での仕事(という概念)
なんらかの意図をもって行なう努力を伴う活動・作業・任務
③ task　：義務として課せられた仕事、任務、作業
work よりも困難を伴うことが示唆されている。
④ labor　：主として肉体的な激しい労働 =toil
疲労、不快感を伴うことを含意する。
⑤ career　：訓練や専門的な教育を要する仕事。または生涯の経歴
⑥ business：利潤を目的とする商業活動などの仕事

one's business は自分の経営している事業・商売をさす。したがって単に自分が従事している仕事を言う場合には one's job を用いる。

⑦ vocation, calling : （神から与えられたと感じ、使命感をもってする）仕事、天職

⑧ profession : 専門知識や訓練を必要とする職業

医者・弁護士・教師・技術者・作家等、知的など。

⑨ occupation : 職業をさす最も一般的な(やや堅い)語

日本語の「職業」に最も近い。

⑩ trade : 主に手を使ってする、熟練を要するような職業

trade には「貿易」「通商」「商売(≒business)、取引」という意味もある。

(7)「影」「陰」。

① shadow : （人や物の形としての）影、影法師

光を物体がさえぎったときにできる、その物体の形をした部分。

② shade : （陽のあたらない部分としての）陰、日陰

光が直接当たらないためにできる、周囲よりも暗く温度が低い部分。

(ex) We rested in[under] the shade[×shadow] of the trees.

私達は木陰で休んだ

【演習】

1. The leafless trees offered little (　　).

2. He saw the (　　) of a woman on the sidewalk in the dark.

3. The building cast a long (　　) on[over] the field.

4. These leafy trees give us a pleasant (　　).

【解答＆全訳】

1. shade (葉の落ちた樹木はほとんど陰を作らなかった)

2.shadow (彼は暗闇の歩道に女の人の影を見た)
3.shadow (その建物が野原に長い影を投げかけていた)
4.shade (この葉の茂った木は心地よい陰を作ってくれる)

⑻「約束」。

① promise　　：約束
② appointment ：1.（時間・場所を決めての）人と会う約束
　　2.（病院・美容院などへの）予約
③ agreement　：（～に関する）協定、契約
④ rule　　：規定、規則
⑤ subscription ：（新聞・雑誌等の講読の）予約
⑥ reservation　：（座席・ホテル等の）予約
(ex) make a reservation for A Aの予約をする
=reserve A
=book A

⑼「ゆるし」。

① admission　：（入会、入場、入社、入学）許可
② permission　：（書類又は口頭による「～してよいという」）許可
=consent
=approval
③ leave　　：(外出して良いという)許可
④ forgiveness ：(罪等の)許し、赦免

⑽「道」。

① path　：（人工的でない自然にできた細い）道
② street　：（街などの両脇に建物が立っていて、歩道がついている）道路
③ avenue ：（都市の）本通り、大通り
④ road　：（都市と都市の間の舗装された車の通れる）道路
⑤ lane　：⑴（建物の脇の細い）道、（田畑の曲がりくねった）道
⑵ハイウェイの車線
⑥ way　：具体的な「道」を指さず、Tell me the way. などのような言い方で用いる

⑾「サイン」。

① sign　　：「合図」「星座」「兆候」「印」「標識」

sign には(「署名する」という動詞になることはあっても)「署名」という(名詞の)意味はない!

② signature　：（書類などにする）サイン、署名

③ autograph　：（有名人などからもらう）サイン

⑿「習慣」。　特に①と②の違いが重要。

① habit　　：（個人の無意識的な）習慣

② custom　　：（社会的な）習慣、慣習 =convention

③ practice　　：（個人が意識的に身につける）習慣

⒀「移民」。

① immigration ：（外国からやってくる）移民　　im =「中(へ・に)」

② emigration　：（外国へ出てゆく）移民　　ex =「外(へ・に)」

⒁「天気」。

① weather　：（ある場所での短期間の空模様としての）天気・天候

② climate　：（ある地域での長期的な気象傾向としての）気候・風土

《もう一歩深く!!》

weather は「不可算名詞」で、climate は「可算名詞」になる。
その理由は、weather は「雨」「曇り」「晴れ」「嵐」…など、(様々ありうる)ある場所での短期間の空模様をまとめて表現したもので、具体的なまとまり(イメージ・形)を持たない。故に「不可算名詞」となる。
一方、「アフリカの気候[風土]」といったらどうだろう。「暑い」「乾期と雨期がはっきりしている」…といったイメージが頭に浮かぶのではないだろうか。故に「気候[風土]」を意味する climate は数えられる、つまり「可算名詞」になるのだ。

⒂「景色」。

① view　：ある方向を見たときの（特に遠方の）眺め、風景

② scene　：⑴(特に)絵のような構成のまとまりを持ち、一目で見渡せる view

⑵(事件などの)現場
⑶場面

③ sight　：特に印象深い光景
名所

④ scenery：ある場所・地方の地理的外観の全体
これに対し、一つ一つの風景は scene。
scenery だけは「不可算名詞」(つまり数えられない)。

⑤ landscape：広々とした陸地の風景、景色 ⇔seascape

⑯「ゴミ」。

① garbage　：(台所から出る)生ゴミ
② trash　：(家庭・オフィスから出る)小型ゴミ
③ rubbish　：⑴=garbage　⑵=trash
④ refuse　：「廃物」に相当する堅い言い方
⑤ litter　：道路等に散らかされたゴミ、紙くず

⑰「ひげ」。

① mustache：口ひげ
② whisker(s)：ほおひげ
③ beard　：あごひげ

⑱「手」「足」。

①「手」
⑴ arm　：腕（肩のつけ根から手首まで）　cf; upper arm「上腕部」
⑵ hand　：手（手首から指の先まで）

②「足」
⑴ leg　：(太もものつけ根から下の部分としての)脚
⑵ foot　：(足首から下の部分としての)足

⑲「群れ」。

① school：(魚の)群れ
② crowd　：(人の)群衆
③ flock　：(鳥、羊の)群れ
④ pack　：(犬、狼などの)群れ

⑤ herd　: (牛、馬、豚などの)群れ
⑥ troop　: (移動する人･サル･アリの)群れ

⑳「迷惑」「心配」「苦痛」

① anxiety ：（悪い結果を予想した）心配、不安
② care　：（責任から生じる）心配、気遣い
③ concern：（関心のあるものに対する）心配、不安
④ labor　: 労働、骨折り =pains
⑤ pain　：（肉体的・精神的）苦痛、苦しみ
⑥ trouble　: 迷惑、面倒 =bother
⑦ worry　：（無用な）心配、心痛
cf; 努力する、骨を折る =make efforts, take pains[trouble]

(21)「怪我」「傷」

① injury, wound : 怪我
② cut　: 切り傷
③ bruise　: 打ち身、（打撲による）あざ
④ stab　: 刺し傷
⑤ scrape　: すり傷
⑥ scratch　: ひっかき傷
⑦ stain　: 汚点、しみ

(22)「価値」

① value : 1.(実用性から見た) 価値、値打ち、重要性、有用性
2.価値、値段、(金銭的) 価値
金銭に換算できる価値としては、 worth も用いられるが、value は、通例高価なものについて言う。merit は賞讃に値する「良さ」を表す。
(ex) market value 市場価値
The two old books are equivalent in value.
その２冊の古書は、同じ価値がある
② worth : (精神的・道徳的な本質的) 価値、重要性、真の値打
value より堅い語。
(ex) a book of little[great] worth
価値のほとんどない[大いにある]本

(23)「目的」

① purpose：目的を意味する最も一般的な語。

(ex) What is your purpose in going to Europe for study?

あなたのヨーロッパ留学の目的は何ですか

② aim：ある計画・行動によって実現しようとする具体的な目標を表す語で、intention(意図) 以上に努力を傾けることを含む。「狙い、照準」という意味もある。

(ex) He worked so hard with the aim of mastering English

英語を習得しようという目的で、彼は熱心に勉強した

③ object：purpose に近いが、努力の目的を具体的に示す語。「目当て」。objective よりもくだけた表現。

(ex) What is your object[purpose] in visiting her?

何を目当てに彼女を訪ねて来られたのですか

④ end：きちんとした計画・手段を通して達成される目的。means（手段）の反意語。

(ex) I want to have my house, and am saving money for this end.

私は家が自分の欲しくて、そのために貯金をしている

⑤ goal：目的の実現に長い時間や多大の労力を必要とすることを暗示する。野心・努力などの「目標」。

(ex) Her goal is to be a great scientist.

彼女の目標は偉大な科学者になることだ

(24) 「人」

① human beings：「(動物に対する)人」という意味が込められる

humans より一般的。humans は科学的文章で用いられることが多い。

② man ：男女を問わず一般に人(人類全体)をさす

単数無冠詞で用いる。人間の普遍的性質を強調する言い方。人類学で用いられることが多い。

③ mankind：集合的に人類全体をさす

ほぼ man と同じ。

man や mankind は男性中心の言い方なので、最近は避けられることが多い。最近では、

a person/ a human being/ people/ human beings/ the human race/

humanity/ humankind/ we

などを用いるのが普通とされる。

(25)「特徴[性]」

① quality ：「量(quantity)」の反意語

「優秀性」「良質」を意味することが多い。

② property ： その種類に共通の特性

「所有物[権]」「財産」という意味もある。

(ex) the properties of iron

鉄の特性

③ attribute： その物が本来備えている性質、固有の属性

(ex) Kindness is an attribute of a woman.

優しさは女の特質である

④ trait ： 通例人間についての特性[色]、特性を言う

(ex) Blond hair is her family trait.

金髪は彼女の家族の特性だ

⑤ character： (人の) 性格、気質

「人格」「品性」、あるいは物の「特徴[質]」を表すこともある。

ちなみに characteristic は、特定の人または物について常に心に浮かぶ「特性」。feature 注意を引く顕著な「特徴」。.

(ex) a man of noble character

人格高潔な人

⑥ nature ： 人または動物の生まれつきの性質、本性

⑦ disposition： (行為・人との関係に現れる生来の)気質、性分

(ex) a cheerful disposition

ほがらかな性質

(26)「罪」

①sin ：宗教・道徳上の罪

②crime ：法律上の罪

③guilt ：(特に道徳・刑法上の)罪のあること、有罪

④offence ：規則などに対する違反

⑤blame ：失敗などに対する責め

⑥fault ：過失、落ち度

(27) cloth 関連。

①cloth　:「布(地)」。

複数形は cloths 。

(ex)　It took four yards of cloth to make a suit of clothes for him.

彼の洋服を作るのに４ヤードの布地が必要だった

②clothes :「衣服」。

上着・ズボン・シャツなどの個々の衣類の集まりのことを指して言う。

(ex) a suit of clothes

服１着

Are these clothes for everyday wear?

これは普段着ですか

③clothing :「衣類」。

clothes よりやや格式ばった語。集合的に「衣類というもの」という意味。衣服以外にも、帽子・靴など身につけるものをすべて含む。また、個人使用の clothes に対して商売用のものを指して使う。数えるときは three articles of clothing(衣類３点) などと言う。

(ex) women's clothing

婦人用衣料品

food, clothing and shelter

衣食住

④clothe :「服を着せる[与える]」という意味の動詞。

受動態で使われることが多い。

(ex) The lady was warmly clothed.

その婦人は暖かい服を着ていた

Nancy was clothed in red.

ナンシーは赤い服装をしていた

発音問題用には cloth と clothe の違いをおさえておこう。

cloth の th は[θ]。clothe の th は[ð]。これは bath と bathe、 breath と breathe の関係と同じなので覚えやすい。

意外な意味を持つ名詞。

account 「口座」
act 「(芝居・劇の)幕」
art 「技術」「こつ」「要領」
board 「委員会」
break 「休息」
calling 「職業」
capacity 「能力」
case ①「例」②「患者」
③「事実」「真相」
cause ①「大(主)義」②「理由」
challenge「やりがいのある事」
change 「釣り銭」「小銭」
class 「階級」
company 「一緒にいること」
command「(語等を)操る能力」
dish 「料理、食べ物」
drive ①「衝動」
②「(グループ)運動」
duty 「関税」=customs
effect 「趣旨」
(ex) to the effect that～
「～という趣旨の」
end 「目的」
fault 「責任」
fashion 「やり方」=way, means
figure ①「人物」②「図形」
③「数字」④「計算」
fine 「罰金」
fit 「発作」
helping 「(食物の)一杯」
order 「秩序」「規律」
party ①「党(派)」②「相手」
point ①「効果」
(ex) there is no point in doing～
「～しても無駄だ」
②「要点」
(ex) to the point「的を射た」
practice ①「習慣」
②「(医者・弁護士等の)業務・仕事」
③「(医者・弁護士等の)患者・依頼人」
reason ①「理性」
②「道理」「分別」
respect 「点」
right 「権利」
room 「余地」「空間」
rule 「支配」「統治」
safe 「金庫」
school ①「(学問等の)学派、流派」
②「(大学の)学部」
③「(魚の)群れ」
second 「瞬間」
sense ①「意味」
②「認識力」
sentence 「判決」
shade 「(意味等の)わずかな違い」
shame 「残念な事」=pity
side 「脇腹」
something「(無冠詞で)重要人物」
「大したこと」
soul 「人間」

humor 「気分、機嫌」
image 「生き写し」
interest ①「利息」
②「利害(関係)」「利益」
leave ①「許可」
②「休暇(期間)」
life ①「(集合的に)生物」
②「伝記」③「活気」
④「活気を与えるもの」
⑤「実物」「実物大」
line ①「職業」②「一筆」
matter 「物質」
means 「財産」
mine 「鉱山」
might 「力」
much 「大したもの(こと)」
name 「名声」「評判」
notice 「通知、知らせ」
at[on] short noticeで「急に」「すぐさま」というイディオムもある。元々は「十分な予告通知なしで」。

spirits 「(強い)酒」
stranger 「見知らぬ人、～に不案内な人」
study ①「書斎」
②「研究」「調査」
subject 「話題」
table 「表」「リスト」
(ex) a table of contents「目次」
tongue 「言語」
(ex) mother tongue「母国語」
treat 「(滅多にない)楽しみ」
trial 「裁判」
turn ①「順番」
②「才能」=talent, gift
vehicle 「伝達手段」
want 「不足」
way ①「癖」②「点」
well ①「井戸」②「源泉」
will ①「意志」②「遺言書」
word 「(one's～で)約束」
(ex) keep[break] one's word「約束を守る[破る]」

レクチャー11

複数(形の)名詞の所有格のアポストロフィ(')の付け方。

複数(形の)名詞の所有格の作り方は、 s で終わる複数名詞には、アポストロフィ(')だけをつけます。

(ex) a girls' school 女学校
ladies' gloves 婦人用手袋
birds' nests 鳥の巣
April Fools' Day エイプリルフール

s 以外で終わる複数(形の)名詞には ’s をつけます。

(ex) children’s toys 子供のおもちゃ
men’s coats 紳士用上着
a women’s college 女子大学

特に s で終わる複数(形の)名詞の所有格について、アポストロフィをどこに付けるのかが問われやすいのでしっかりおさえておきましょう。

冠詞

レクチャー1

a のついた名詞の特徴。

a のついた名詞というのは、それが(会話・文章などで)登場した時点では、

「その中身は話し手[書き手]は分かっているが、聞き手[読み手]の方はまだわからないもの」

です(つまり両者で認識を共有していない)という特徴があります。
たとえば以下の英文を見てください。

(ex) I saw a cute high school girl on the train yesterday.
昨日電車の車内で可愛い女子高生を見たよ

と話し手が言った場合、話し手自身にはその女子高生の具体的なルックス、ファッション、雰囲気などについての情報は、(自分が言い出したのですから)わかっていますが、聞き手の方にはこの時点では一切わかりません。したがって聞き手の方は、 a ついた名詞が現れると、

「さてそれは、具体的にどんな人・物なのだろう」

といろんなイメージを頭の中で沸かせることになります。
このように、冠詞の a には、「相手に興味を抱かせ、連想させる」「相手にイメージさせる」働きがあると言える。

ということは、言い方を変えれば a がつくということは、その名詞は「(頭の中で)イメージできる」ということにもなります(これを文法用語では可算名詞と言い、「イメージできない」名詞を不可算名詞と言う)。

the のついた名詞の特徴。

⑴「the + 名詞」の特徴。

the のイメージを一言で表せば

「(文脈から、あるいは状況から)自動的に１つに決まる[特定される]」

ということです。つまり the をつけることによって、その名詞についての認識を話し手[書き手]と聞き手[読み手]双方が持っている(両者が認識を共有している)ことを示すことになるのです。要するに「相手も了解済み」であると判断できる場合に、その名詞に the をつけるのです。日本語に強いて訳すとすれば、「例の(あの)～」に近いと言えるでしょう。

この点は、話し手[書き手]しか具体的な中身を認識していない a とは対照的と言える。

表現を変えれば、「the+名詞」は、聞き手の方も「あ、例のあれネ！」と、最初からその存在を(話し手と共に)知っている、つまりその存在を認めることになります。聞き手は(「さてなんなんだろう」などと)余計な頭を働かせる必要がないということにもなります。
たとえば

(ex) Did you know the criminal had been arrested?
君はその犯人が逮捕されたことを知っていましたか

とあながた質問された場合、話し手は、あなたもその犯人(the criminal)について既に知っていることを前提で語っています。

また、太陽、地球、月はそれぞれ the sun, the earth, the moon と the がつきますが、その理由は、我々が共通認識として持っている「太陽」「地球」「月」は、「一つに決まっている」からです。

⑵初めて登場した名詞でも the が付くことがある。

今説明した通り、the のもつイメージは

「(文脈から、あるいは状況から)自動的に１つに決まる[特定される]」

ということです。したがって「初めて出てきた名詞」でも、文脈[状況]から自動的に１つに決まってしまう場合には、the がつくことがあります。

(ex) It's a little too cold. Will you close the window?
ちょっと寒いんですが。窓を閉めてくれますか

この例文で、window の冠詞が the になっているのは、

1.部屋の中には窓がそれ１つしかない
2.部屋の中で開いている窓はそれ１つだけ

といったような理由で、「その場の状況から自動的に１つに決まる」からです。

レクチャー3

「There is[was]+名詞」構文と冠詞。

「There is[was]+名詞」構文では、名詞には基本的に a がつきます。
文頭の There は、それ自身には意味はありません。次に現れる主語を導く「導入の there」と呼ばれるものです。したがってその後にくる主語は「新情報」となるのが自然なのです。したがって「a+名詞」が基本なのです。

(ex) There is a smartphone on the desk. ☜A smartphone is on the desk.
机の上にスマートフォンあります　　とは言わない。

これを There is the smartphone on the desk. とあえて言うと、the が付いた名詞は旧情報なので(「レクチャー７」を参照せよ。)、スマートフォンがあるということが(話し手・聞き手双方にとって)前提の知識となり、その「スマートフォン」がどこにあるのかを言わんとする文となります。たとえばスマートフォンと財布を探していて、そのうちスマートフォンの方は机の上に見つかった(財布はまだ見つからないけど)というような場合に述べるような表現となります。単に「そのスマートフォンは机の上にあります」というような場合は

The smartphone is on the desk.

と言います。

レクチャー4

「a」……「いくつかあるうちのひとつの～」
「the」…「唯一の～」

a と the には、上記のような区別の仕方もあります。そしてこのようなとらえ方が身につくと、以下の英文の違いも簡単に理解できるでしょう。

① This is a CD I bought last year.

② This is the CD I bought last year.

①と②の違いを明確にして訳すとすれば次のようになるでしょう。

①「私が昨年買ったＣＤは何枚かあって、これもそのうちの１枚です」
②「私が昨年買ったＣＤはたった１枚で、これがまさにそのＣＤです」

では、以下の空欄には a と the のどちらが入るでしょう？

③ I am (　) student at Hiroshima University.
私は広島大学の学生です

④ Someone stole (　) motorbike he left in front of the building.
彼はそのビルの前に置いてあったオートバイを盗まれた

答えは③に a 、④に the が入ります。③に the を入れてしまうと、「私は(この世で)唯一の広島大学の学生だ」という意味になってしまいます。また④に a を入れてしまうと、「彼はそのビルの前に何台かオートバイを置いてあって、そのうちの１台が何者かによって盗まれてしまった」という意味になってしまい、常識的に不自然です。
もう一つこんな例を。「ウソをつく」という場合 tell a lie と言いますが、「真実を言う」という場合 tell the truth と言います。これは、ウソはいくらでもあり得ます(言い方を変えれば一つに特定できない)。しかし真実はたった一つしかないからです。
「真実性」「真実味」という意味で truth が使われる場合は、無冠詞に

なることもある。

(ex) There is some truth in what he says.
彼の言うことには何かしらの真実味がある

また「立証された一つの真理[原理・事実]」という場合には a truth となる。

(ex) The scientist discovered an important truth.
その科学者は重大な原理を発見した

レクチャー5

「that + 名詞」。

せっかくなので「that+名詞」についても説明しておきましょう。
以下の英文を見てください。

(ex) Do you know that boy over there?

この英文の that boy ですが、the boy と言うのとでは何が違ってくるのでしょう？
実は、名詞に that がつく状況というのは、

その「人・物」が目の前にいて、それを指さしながら「ほら、あの人」
「ほらあれだよ」というような場合

です。
したがって、上の英文の訳は

あそこにいるほら、あの少年を知っていますか

とでもいったものになります。
もちろん実際に指をささなくても、そのような気持ちを込めて

What's that noise?
あの騒音は何だろう

などと言うこともあります。
また the とほぼ同じですが、より強調したいような場合に that が使われるこ

とがあります。

(ex) I can't forget that day.
あの日（のこと）は忘れられません

あるいはもっとシンプルに、「this+名詞」に対する「that+名詞」として使われることもあります。当然ながら this+名詞 に対して that+名詞は、物理的・心理的に話者から距離を感じている場合に用いられます。

(ex) This novel is more difficult than that one.
この小説はそれより難かしい

レクチャー6

不定冠詞(a[an])の特殊な用法。

不定冠詞と呼ばれる a[an] は、

①可算名詞の単数形を文中にはじめて登場させる場合
②「（いくつかある中の）ひとつの～」という意味

で用いられるのが基本ですが、それ以外にも様々な意味があります。文法語法問題用には、◎をつけた項目をおさえておきましょう。

⑴「ある～」　＝a certain

(ex) The rumor is true in a sense.
それはある意味で真実だ

⑵「いくらかの」　＝some

(ex) Mark thought for a while.
マークはしばらくの間考えた

⑶「同じ」　＝one and the same

(ex) Birds of a feather flock together.
同じ羽毛の鳥は群れ集まる ⇨　類は友を呼ぶ

◎⑷「～につき」＝per

(ex) We have five English classes a week.
英語の授業は週に５時間ある
a はふつうの口語調。 per は改まった実務英語などに用いる。

⑸「どれでも」「～というもの」＝any
「～というものならどれでも」という意味で、不特定の１つを代表として取り上げ、その種類のものすべてについて特有の性質を述べる形です。
このような総称を表すのは、原則として主語になる場合です。

(ex) A house of stone is more durable than a house built of wood.
石造りの家は、木造の家より耐久性がある

◎⑹「a[an]+固有名詞」

①「～と(か)いう人」

(ex) A Smith spoke to me at the conference.
スミスとかいう人が、その会議で私に話しかけてきた

②「～のような人」

(ex) I want to be an Edison in the future.
将来はエジソンのような人になりたい
He is an Obama in speech.
彼は弁舌にかけてはオバマのような雄弁家だ

この場合、a[an] の後には、「有名な人物」または「話し手と聞き手の間ですでに共通にわかっている固有名詞」がくる。引き合いに出す人物によっては、人をけなす場合にも用いられる。

③「～家の人」

(ex) His wife is a Tokugawa.
彼の奥さんは徳川家の人だ

④「～の作品・製品」

(ex) He bought a Ford and showed it to me.
彼はフォード社の車を買って私に見せてくれた

その名詞に a をつけるか an をつけるかについての注意点

① 母音字で始まっていても、発音が子音の語には原則として a をつける。

(ex) a university　a European　a one-man show

② h で始まっていても(直後が母音で)、その h を発音しない語には an をつける。

(ex) an hour　an heir(相続人)　an honor(名誉となるもの)

③ 略語でも、発音が母音で始まるものには an をつけるのがふつう。

(ex) an MP(代議士)　an SOS(遭難記号)

レクチャー7

定冠詞(the)の特殊な用法。

the については、以下の３つの用法が最も一般的です。

①旧情報(つまり既出)の名詞に付ける
前に一回述べているから「ひとつに決まる」。
(ex) I met a poor girl and the girl was blind.
あるかわいそうな少女に会った。その少女は目が見えなかった

②前後の関係からそれとわかる名詞に付ける
つまりこれも「ひとつに決まる」。
(ex) Will you open the window?
窓を開けてくれませんか

③常識的に「唯一のもの」をさす名詞に付ける
これまた「ひとつに決まる」

(ex) the sun, the moon, the earth, the universe(宇宙), the sky など。

上記以外にも、 the には様々な用法があります。これも文法語法問題用には、◎を付けた項目を特に注意してください。

⑴「～というもの」という意味で、その種族全体をひとまとめにして表す。
a[an] にも同じような(総称)用法ありますが、「the+名詞」の方がやや形式ばった学問的記述などに用いられます。また a[an] と違って、目的語の位置でも総称を表すことができます。

(ex) The horse is a useful livestock.
馬は役に立つ家畜だ
My sister plays the violin.
妹はバイオリンをひきます

◎⑵「the+形容詞[分詞]」。

①「～な人々」という意味で「人を表す複数名詞化」することがある

(ex) the rich「金持ち」 the young「若者」
＝rich people ＝young people
the poor「貧乏人」 the old「老人たち」
＝poor people ＝old people

②「～なもの、こと」という意味で「抽象名詞化」「集合名詞化」することがある

(ex) The most important is yet to be explained.
最も大切なことがまだ説明されていない
The task approaches the impossible.
その仕事は不可能に近い

◎⑶「catch[take など] + A(人) + by + the + B(身体の一部):ＡのＢをつかむ」。
このような「A(人) + 前置詞 + the + B(身体の一部)」を用いる表現[動詞]として、以下のものはおさえておきましょう。

(ex) He caught[took] me by the arm.
彼は私の腕をつかんだ

by は「つかむ場所」を表す前置詞。

She seized the child by the collar.

彼女は子供のえりをつかんだ

He shook her roughly by the shoulder.

彼は乱暴に彼女の肩をゆすった

He kissed the girl on the forehead.

彼はその女の子のひたいにキスした

on は「接触」を表す前置詞。

He patted me on the back.

(注意を引いたり、慰めるために)彼は私の背を軽くたたいた

He looked[stared] me in the eye.

彼は私を[じっと]見つめた

◎(4)「by + the + A(単位を表す名詞)」で「～単位で」という意味になる。

(ex) We buy tea by the pound.

私たちはポンド単位でお茶を買う

The workers are paid by the week.

その労働者たちは週給制だ

(5)「the + (単数の)普通名詞」が抽象名詞化することがある。

これは文語的な表現で、諺など比較的限られた表現に見られるものです。

(ex) The pen is mightier than the sword.

文筆(ペン)の力は武力より強い

レクチャー8

冠詞に関するその他のルール。

(難関私大以外の)文法問題用には、(1)だけ覚えておけば十分。

(1)交通[通信]手段を表す by の後ろの名詞は、必ず無冠詞にする。

交通[通信]手段を表す by の後ろの名詞は、必ず無冠詞にしなければなりません。

(ex) by car[train/ plane/ ship] 車[列車/飛行機/船]で
by radio[telegram/ telephone] 無線[電報/電話]で

by の後ろの名詞は無冠詞にするということは、「車で行く」という表現は go by car であり、go my car とか go by the car とは言わないということです。
ただし、by 以外の前置詞の場合は冠詞(又は所有格)が必要となります。

(ex) go in my car
come on a plane

また、名詞が形容詞で修飾されたり、具体的に「何時何分のものか」を述べる場合は、冠詞を伴います。

(ex) I will go to the airport by the 7:30 bus.
私は７時３０分のバスで空港に向かいます

交通[通信]手段の by の後の名詞のように、慣用的に無冠詞で名詞が用いられる表現として、以下のようなものがります。

① bed, class などの名詞がその本来の目的(bed なら「寝る」、class なら「授業」)の目的を表すとき。

(ex) It is time you went to bed.
あなたは寝る時間ですよ
She is in class now.
彼女は今授業中だ

②食事の名前

(ex) I had curry and rice for lunch.
昼食にカレーライスを食べた

ただし、特定の食事の時には冠詞をつける。

(ex) I didn't like the breakfast my mother had served.
私は母が出してくれた食事が気にいらなかった

③病気の名前

(ex) My mother had breast cancer.

母は乳癌だった

④季節の名前

(ex) I like autumn of all the seasons.
全ての季節の中で秋が一番好きだ

ただし特定の季節には冠詞がつく。

(ex) The earthquake occurred in the spring of 2011.
その地震は2011年の春に起きた

⑤１人によって占められる役職を表す語が補語になる場合
※ただし冠詞がつくこともある。

(ex) Jack is (the) captain of the team.
ジャックはそのチームのキャプテンだ

⑵固有名詞と定冠詞。

①定冠詞のつく固有名詞

1.「新聞」「雑誌」

(ex) The London Times ロンドンタイムズ
The Economist エコノミスト

2.「団体名」

(ex) the Republican Party 共和党
the Liberal Democratic Party 自由民主党

3.その他

河川・海洋：the Thames, the Sea of Japan, the Atlantic (Ocean)
山脈：the Rockies, the Himalayas, the Alps
群島：the Philippines, the Marshal Islands
海峡・半島：the English Channel, the Kii Peninsula

運河：the Panama Canal, the Suez Canal
砂漠：the Sahara (Desert), the Gobi (Desert)
船舶：the Titanic, the Queen Elizabeth 2
官公庁：the Ministry of Foreign Affairs,
the Department of the Interior
博物館・図書館・劇場など：the British Museum, the Eiffel Tower
the Globe Theater, the Library of Congress

②the のつかない固有名詞

一般に、国名・大陸・州・県・都市・山・湖・島・岬・公園・広場・駅・橋
学校・教会・城・天体などには the をつけない。

(ex) Japan, Europe, California, Aichi Prefecture, Mount Fuji,
Lake Biwa, Sado Island, Cape Horn, Yoyogi Park, Tokyo Station,
London Bridge, Juilliard School of Music, Westminster Abbey,
Himeji Castle, Venus

「〇〇大陸」という場合には the がつく。

(ex) the Eurasian Continent ユーラシア大陸
the Antarctic Continent 南極大陸
the Asiatic continent アジア大陸

国名でも「〇〇連邦」「〇〇共和国」「〇〇帝国」という場合には the がつく。

(ex) the Soviet Union ソ連
the Republic of Korea 大韓民国
the Roman Empire ローマ帝国

「アメリカ合衆国」も以下のように表す。

the United States (of America)
the U.S.
the U.S.A.

「イギリス」は以下のように表す。

the United Kingdom
the U.K.
㊟正式名称は the United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland。